



横浜市立一本松小学校

9月号

令和4年8月29日
横浜市立一本松小学校
校長 高桑 透

学校だより

「甲子園優勝監督インタビューから」

校長 高桑 透

長い夏休みが終わり、元気な子どもたちの声が校内で聞こえています。感染症の状況としては、厳しい日々が続いていますが、学校では夏休み前までと同じように、引き続き子どもたちの安全・安心のために万全の注意を払いながら教育活動を行っていきます。

今年の夏は行動制限が解けていることもあり、いろいろなところへ出かける人も増え、以前ほどではなくても、夏休みらしい様子が見られました。私が毎年夏休みに楽しみにしていることの一つは、甲子園で行われる高校野球です。

今年の甲子園大会は、3年ぶりの一般客も含めた有観客の大会となりました。選手の皆さんは、大観衆の前で大好きな野球ができる喜びを特に感じる事ができた大会だったのではないのでしょうか。どの試合にもドラマがあり、素晴らしいプレーがたくさんありましたが、今年自分が特に心を動かされたのは、優勝した仙台育英高校の須江航監督のインタビューです。

—今年の3年生は入学した時から新型コロナウイルスの感染に翻弄されてきました。それを乗り越えてのこの優勝、3年生たちにはどんな言葉をかけたいですか？

「入学どころか、多分おそらく中学校の卒業式もちゃんとできなくて、高校生活っていうのは何て言うか、僕たち大人が過ごしてきた高校生活とは全く違うんですね。青春ってすごく密なので。でも、そういうことは全部駄目だ、駄目だと言われて、活動をしていてもどこかでストップがかかって、どこかでいつも止まってしまうような苦しい中で、でも本当に諦めないでやってくれたこと。でも、それをさせてくれたのは僕たちだけじゃなくて、やっぱり全国の高校生みんなが、本当によくやってくれて、例えば、今日の下関国際さんもそうですけど、大阪桐蔭さんとか、そういう目標になるチームがあったから、どんな時でも諦めないで、暗い中でも走っていったので、本当に全ての高校生の努力のたまもの、ただただ最後、僕たちがここに立ったというだけなので、ぜひ全国の高校生に拍手してもらえたらと思います」

3年前から、子どもたちは今までと違う学校生活を送っています。楽しみにしていた学校行事や、目標としていた大会がなくなってしまうことがありました。中学校や高校では、部活動事体をあきらめて退部してしまったり、入部しなかったりした子もいたそうです。私たちの想像している以上に、イレギュラーな学校生活を送ることになっています。須江監督の言葉のように、社会全体で高校球児に限らず、子どもたちのことを認め励まし育てていかないといけないと強く感じるインタビューでした。

まだまだ以前のような教育活動をする事はできませんが、子どもたち自身も持っているたくましく生きる力を信じた上で、少しでも充実した学校生活を送ることができるようにしていきます。引き続きご理解ご協力をお願いいたします。